小葉田先生と「沖縄の歴史情報研究」

岩崎 宏之：筑波大学歴史・人類学系

昭和10年5月30日発行の大阪朝日新聞の第1面には「埋もれた"歴代宝案"　燦然・学界に発表－東洋交易史上貴重な文献－　発見者小葉田助教授談」の大きな見出しで台北発の記事が紙面を飾っている。「台北帝大文政学部の新進助教授小葉田淳氏は本年四月の休暇を利用して沖縄方面に東洋貿易史に関する文献の探索に赴いてゐたが、過日那覇市の県立図書館において長い間人に知られず埋もれてゐた東洋貿易史研究上の画期的文献を発見、近く学界に発表することになった」ということで、台北大学の制服・制帽を着した先生の若き日の写真が添えられている。

小葉田先生はすでに卒寿を過ぎたご高齢ではあるが、矍鑠として本領域研究の顧問をお引き受け下さった。「寄せ書き」の機会を利用して、小葉田先生と本領域研究との繋がりなど、少々私事にわたることを含めて記しておきたい。

ご承知のように、日本歴史学協会では「国立歴史情報資源研究センター」設立の構想が浮上し、私たちはその実現に向けて議論を重ねていた。しかし総論では皆さん一致しても、歴情研センターが何を為すべきかの具体的内容になると様々に意見が分かれていた。歴情研センターの構想を具体的に示すには、まず何ができるかを身をもって確かめてみるのがよい。幸いにして平成4年度に重点領域研究開設のための科学研究費総合研究(B)が採択になり、勝村哲也氏と私はこの歴史研究へのコンピュータ導入の共同研究をどのような研究分野をフィールドとして進めるかについて種々模索していた。国内でのいくつかの史料群を候補に検討してみたが、重点領域研究の場としてはいささかインパクトに欠ける。中国、台湾、韓国、東南アジア等々、実験的な歴史情報研究の場としてどこが適当か、史料の所在、研究者の層の厚さ、歴史研究と情報科学を結んでどのような研究課題の設定が可能であるか、どのような史料群を対象として情報化の作業が進められるか等々、なかなか決めかねていた。アジアへの広がりを考えるにしても、どのような枠組みで考えられるものか、小葉田淳先生のご意見を伺ってみようと、勝村氏と2人で先生をお訪ねした。

実は、筆者が小葉田先生のご指導を受けるようになったのは、昭和41年に三井金属鉱業株式会社の『神岡鉱山史』の編纂がご縁であった。その頃、財団法人三井文庫の研究員であった私は、三井金属鉱業の社史編纂に参加し、しばしば飛騨高山の奥の神岡へ調査に出かけていた。小葉田先生がまだ京都大学にお勤めの最後の時期で、先生は総監修となられ、現地調査にも先頭に立たれて随分山奥にまでお供をして歩いたものである。私は、原稿が出来ると、たびたび先生のお宅まで参上して目を通して頂いたが、いつも泉湧寺前の電車の停留所の側にあった末福という旅館に泊った。そこは、飛越国境に近い茂住の照蓮寺の和尚が信徒を連れて本願寺にお参りする時の常宿であった。編纂の会議の後、末福で宴会となり、お酒を召し上がらない先生も参加されたが、帰りに神岡の奥田静平さんの靴をまちがえて帰られたことを、今でもご記憶されているのには驚かされた。

福井の中竜鉱山に講演に出かけたことも懐かしい思い出である。福井駅で京都からの先生と落ち合い、三井金属の編纂室長の宮崎氏と三人で迎えの車に乗って延々と九頭竜川を遡行した。帰途には丸岡のお城や先生のご生家の辺りをご案内頂き、芦原温泉の開花亭に１泊、翌日越前岬を訪れた。芦原温泉で、宿の女将にそそのかされて先生をストリップに連れ出したが、そこでは川を下ってきた青年たちの九頭竜太鼓の演奏が見事であった。先生は台湾から引揚げられて暫くの間、東京文理大におられた関係で、東京教育大での先輩の多くが先生の教え子であった。筑波大にいるその頃の門下生が、科学万博を機に先生を筑波にお招きすることになり、私も先生とのご縁で先輩にまじって参加することになった。すでに学士院会員で毎月の例会に出席されている先生を、「門下生」の最若年者である私が上野の学士院までお迎えしたこともあった。そんな昔からのご縁で、先生に気安く相談ができたのである。

先生の書斎のたたずまいは、昔とすこしも変っていない。中国や台湾における先生の知友の方々のお話など、先生のお話は止まることがなかったが、その時に始めて先生が沖縄県歴代宝案編集委員会の委員長を務めておられること、そして『歴代宝案』の遠大な刊行計画が進められていることを知ったのであった。「歴代宝案」の編纂にコンピュータを使えるのではないか、実はこれが「沖縄の歴史情報研究」のそもそもの起点で、それから幾度か先生をお訪ねして「歴代宝案」の情報化を軸にして、沖縄をフィールドにする研究プロジェクトの構想が具体化してきたのである。たまたま台湾の曹永和先生が来琉されるというので、ともかく勝村氏と二人で沖縄に行こうとなったが、その時には沖縄で訪ねるべき方々に宛てた紹介の名刺を１０枚ほども書いて下さった。その名刺に導かれて、私は初めて沖縄入りをすることができた。1992 年の 11 月のことで、那覇市内を見学している「琉中交渉史シンポジウム」の一行を勝村氏と首里城で待ち伏せして、曹先生にお会いした。

重点領域研究が始まってからも、先生はずいぶん私たちにつきあって下さった。研究会にも何度も出席して下さり、いつも最前列に端座されて熱心に聴いておられた。また平成６年 12 月の総括班研究会ではご自身の沖縄研究への関わりについてご講演下さった(「沖縄の歴史情報研究」への期待、講演要旨はニューズレター『沖縄の歴史情報』第４号に掲載)。奄美での研究会の開催が話題になると、沖縄調査旅行の帰りに初めて奄美大島に行かれた時のことを実に懐かしそうにお話になられた。先生のポートレートが『アエラ』の表紙を飾り、本文中に石垣島の浜辺で海を眺めている先生の写真が掲載されていたが、それを見ると先生の沖縄への深い思いが伝わってくるようであった。先生とお話ししていると、時々別室に立たれて、いろいろな資料を出して下さる。相当以前に作られたと思われるメモやパンフレットなど、さまざまの資料が実に的確に、すばやく現れてくるのが不思議なほどである。先生のご記憶の確かさと資料管理が行き届いていることがしのばれる。最初に記した大阪朝日新聞もそうだが、1972 年５月 19 日付のハワイ・タイムス「沖縄祖国復帰記念号」がきちんと保管されているのも驚きである。本重点領域研究の面々で、先生の「文化功労者」授賞をお祝いする会を、先斗町の酒亭「ますだ」で開いたことも、佳い思い出となるであろう。この『総括班研究成果報告書』を、まず第一に先生にお届けしたいと考えている。

「寄せ書き」の一人の持ち分は１ページときめてあるが、いつものごとく長広舌となった。
編集担当者の特権による特例として、お許しくだされ。